説　　教　　詩篇27篇1～5節　　マタイ福音書6章5～8節

「キリスト者の祈り」　主の祈り講解（3）
２０１４・１１・０９（１４４２１５６２）

マタイによる福音書の6章5節以下には、主イエスの「祈りについての教え」が語られています。「祈ること」は私たちにとって「主日の礼拝を守ること」「日々聖書に親しむこと」と並んで、信仰生活の基本的な三本柱のひとつです。私たちの信仰は「神」や「人間」や「救い」に関する知識ではありません。信仰が生きた「信仰生活」になるのは何よりも「祈り」においてです。日々「祈り」を献げることによって、はじめて私たちの信仰は単なる知識の域を超えて、活ける神との交わりの生活となるのです。

今年、私たちは幾人もの主にある親しい信仰の友を天に送りました。甘利保子さん、そして星野淳さんのことを思い起こすのです。二人とも「祈りの人」でした。甘利さんは4人のお子さんたちに先立たれるという、母として最大の悲しみを経験された人です。しかしその悲しみの中で、祈りの生活は深められてゆきました。いつも葉山教会のために、そして私の牧師としての働きのために、祈りを献げていて下さいました。星野さんも祈りの人でした。お元気なころは祈祷会にも休まず出席されていました。星野さんの祈りはとにかく長かった。熱誠溢れる祈りをいつも献げられました。それは自宅においても変わることはありませんでした。このような「祈りの勇者」たちの歩みを思うたびに、私たちは彼らと共に主に栄光と讃美を帰したてまつるのです。

さて「祈り」はそのように、私たちの信仰生活の大切な“生命線”です。だからこそ主イエスは、その大切な「祈りの生活」について、今朝のマタイ伝6章5節において「また祈る時は、偽善者たちのようにするな」と厳しいことを仰せになりました。先週に続いてここにも「偽善者」という言葉が出てきます。私たちがふだん考えているような意味ではなく、なにが私たちの祈りを“真実なもの”にするのかをお教えになっておられるのです。なによりも主は「(あなたが) 祈る時には…偽善者たち」のようであってはならないと言われました。ここでの問題の中心は「礼拝」にかかわることです。「祈り」の生活とはそのまま「礼拝」の生活だからです。だからこそ、それは崩れてはならないものです。もしそれが崩れたなら、植村正久牧師は「腐った鯛ほど始末に負えぬものはない」と語られました。どんなに立派な鯛も、否、それが立派な鯛であればあるほど、もし腐ったならば、なおさら鼻持ちならぬものになるのではないでしょうか。それが「偽善者たちのようにするな」と言われた主の御言葉です。

では「偽善者の祈り」とはどのようなものでしょうか。なによりも主は5節にはっきりと言われます「彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む」。なるべく人が大勢集まるところで、人々の注目を浴びながら祈ろうとする、それが“偽善者の祈り”だと主は言われます。その背景には、当時のイスラエル社会において“祈ること”が立派な「義」なる行為として尊敬されていたという事実がありました。現在の私たちの社会においては、そういう感覚は全くないでしょう。たとえばもし私た

ちが逗子駅前のロータリーで祈っていたとしたら、尊敬されるどころか「なにやら怪しい集団がいる」と思われるかもしれない。だから私たちにはここに書かれているようなことは、まず無いと申しても過言ではないのです。しかし、事柄はそういう問題なのでしょうか？。もちろんそうではありません。

むしろ続く6節に「あなたは祈る時、自分の部屋にはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい」と言われていることに、私たちは心を向けねばなりません。それはただ「人目につかぬ場所で祈りなさい」（駅前広場で祈るべきではない）という意味ではありません。大切なのは続く御言葉です「隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい」。誰も見ていない所で祈れば、その祈りは真実なものになるのだということではないのです。たとえ人の目があっても無くても「隠れた所においでになるあなたの父」である“神のまなざし”の前で祈ることにおいてこそ、その「祈り」は本当の「祈り」になるのです。主イエスが「偽善者たちのように祈るな」と言われたのは、あなたは人前で祈るにせよ、一人で祈るにせよ、あなたの「祈り」がいつも父なる神に向けられたものでありなさいということです。だから問題は、人が見ているか見ていないかということではない。ただ主なる神の前での「祈り」の生活になっているか否かということなのです。

よく「私は誰それさんのような立派な祈りはできません」等と言って、人前での祈りを遠慮するかたがあります。しかしそれは、神の前での謙遜とは違うと思うのです。そこでも主イエスの「偽善者」という言葉が響くのではないでしょうか。私たちはいつでも人からの「報い」を求めてしまうからです。「人からの報いを受ける」とは元々のギリシヤ語では「領収書を受けてしまっている」という意味です。逆に言うならば「私のこの貧しい祈りは、人から評価を（領収書を）戴くに値しません」という遠慮を私たちはしてしまう。それこそ「偽善者」の祈りになってしまうのです。大切なのは神からの「報い」（評価）です。領収書を出して下さるかたは神なのです。その領収書にはこう書かれています「あなたの罪の代価は御子イエス・キリストの十字架によって完全に支払われた」と。私たちはその「神からの報いたるキリストの恵み」を拒絶するような「祈り」の生活をしてはいないでしょうか。そこでこそ主イエスは言われます「あなたの祈りは、偽善者の祈りであってはならない」と！。

私が親しくしているある牧師先生ですが、まだお子さんたちが（お嬢さんたちが）小学生であった頃、家族でファミリーレストランで食事をしていたとき、食前の祈りの声が小さいと、お嬢さんたちに言われたそうです。「お父さんはずるい」。「お父さんはいつも家では大きな声でお祈りするのに、どうしてファミレスでは小さな声なの？」と言われたそうです。これには参ったとその牧師先生は語っておられました。またこれは私ごとですが、天に召された中田荘一さんと、何かの用事で東京行きの電車に乗っていましたとき、中田さんが電車の中でいつもの、あの大きな声で祈られたことがあった。私は正直に申して少し慌てました。ほぼ満員に近い電車だったからです。しかしそれも立派な祈りの姿勢ではなかったでしょうか。人に見せんとしてではない、ただ主なる神の御前で祈りを献げたのです。私はよく病院に行きますが、病室で祈りを献げます。あまり

大きな声では祈りませんが、狭い病室ですから他の患者さんたちにも聞こえます。すると予期せぬ反応が返ってくることがあります。「キリスト教のお祈りは良いですね。私も教会に行きたくなりました」と言われたことが幾度もありました。人の顔に対してではなく、ただ神の御顔のみを仰いで祈る。その基軸が明確であるなら、たとえどこで祈ろうとも、私たちは祝福を告げる主イエスの僕とされているのではないでしょうか。

続く7節と8節には「異邦人のように、くどくどと祈るな」と教えられています。この「異邦人」とは、まことの神を知らず、むしろ神に叛く歩みをしている人のことです。そうすると「祈り」が対象のない「祈り」になってしまう。だからその祈りは「くどくどと祈る」ものとなり「言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思っている」偽善者の「祈り」になってしまうのです。この「くどくど」と訳された言葉は「呪文」というギリシヤ語です。本当の神を知らない人たちが、数多くの神々の名を呪文のように羅列して唱えたことをさしています。その呪文の中心は人間である私たちであって、主なるまことの神ではありません。だからこそ、ここでも私たちは、自分を度外視することはできないのです。

私たちの「祈り」もまた、ともすると自分の願いだけの「呪文」に似たものになってしまう危険があるからです。神を「呪文」で動かそうとする「偽善者の祈り」に似たものになることがあるのです。私たちこそ「祈り」において「異邦人」になることがあるのです。だから「彼らのまねをするな」と主は言われます。「まねをする必要はない」と主は言われるのです。それほどあなたは、本当の「祈り」の幸いに生きる者とされているではないか。まことの神を知らない「異邦人」は、どの神が自分に恵みを与えてくれるか知らないから「言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思っている」。神々の名を手当たり次第に呼んで、どれかが答えてくれると期待するのです。私たちの「祈り」は違います。私たちは御子イエス・キリストを世に与えたもうたほどに、私たちを、またこの世界を、限りなく愛しておられる父なる神に祈るのです。

だから主は 8 節にこう言われました。「あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである」。御子イエスをさえ惜しまず世に与えて下さったまことの神は、願う前から私たちに必要なものをご存じでありたもう。「異邦人」の神は、人間が願い求めを「呪文」のように繰返させねばならない神です。しかし主イエスが私たちに教えて下さったまことの神は「求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じ」でありたもうのです。なぜでしょうか？。「異邦人」の神は、私たちとは別のほうを見ているから、私たちは「呪文」によってその神に振り向いてもらわねばならない。だから「異邦人の神」への「祈り」は「呪文」になるのです。私たちが祈るまことの神はそういうかたではない。私たちが神に目を向け願う以前から、つまり私たちが信仰を持ち祈る以前から、まことの神は、まず私たちのことを知りたまい、私たちを見つめたまい、私たちの救いのために御業を現して下さるかたなのです。ご自分のほうから私たちに近寄って来て下さったかたなのです。そして、私たちの必要をご存じである神は、必要なものを必要な時に与えて下さるかたです。だからこそ私たちは全き信頼をもって「キリスト者の祈り」に生きうるのです。

まことの神がそういうかたであられることは、なによりも、今朝の教えを語られた主イエス・キリストのご生涯を見ればわかるのです。主イエスは父なる神によってこの世に、私たちの罪のどん底に遣わされた独子です。神が独子を遣わして下さったのは、人間がそのように祈り求めたからではなく、神の無償の（一方的な）恵みのゆえにです。そして主イエスは、私たちの全ての罪を背負って十字架上に死んで下さいました。それは、私たちが神を知らず神に叛いていた時にさえ、まことの神はその独子を世に遣わし、主イエスの十字架の死と復活によって私たちの罪を赦し、永遠の生命を私たちに与えて下さったのです。

まさに真の神は、私たちに本当に必要な救いを、恵みを、祝福を、それを私たちが願う以前に備えていて下さり、最も良き時に与えて下さるかたです。私たちはその恵みを、主イエスの十字架の贖いによって知る者とされたのです。だから主イエスが「父よ」と呼びたもう神を、私たちもまた「天にます我らの父よ」と呼びまつる者とされているのです。この主イエスの恵みを覚えつつ、その祝福の中で神の子として、御国の民とされた者として、私たちは「キリスト者の祈り」に生き続けます。今朝の詩篇 27 篇 4 節を心に留めましょう。「わたしの生きるかぎり、主の家に住んで、主のうるわしきを見、その宮で尋ねきわめることを」ここに「祈り」の幸いが私たちと共にあります。この恵みが、この幸いが、私たち一人びとりと共にあることを覚え、感謝をもって「キリスト者の祈り」の生活を続けてゆきたいと思います。